

報告

グローバル化社会に向けた大学教養教育とは

大橋 眞¹, 胡萌萌², 入口幸子³, 間賀田悠吾⁴, 斉藤隆仁¹(¹徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部, ²総合科学部, ³医学部, ⁴工学部)

(キーワード: グローバル化社会, 教養教育, 大学教育)

要約: グローバル化社会に向けた人材育成が大学教育改革の大きな課題になっている。これからの社会がグローバル化していくという社会変動を, 単にある国や地域の問題としてではなく地球レベルの問題として捉えることや, これから起こりうる様々な問題について柔軟に対処できる思考力及び行動力の育成も重要な教育改革の柱となり得る。そのために, 今回の取り組みでは, 学生が地域社会人や留学生と議論を通じて, グローバル化に関する課題への気づきをおこさせることを目的とした授業を, 大学教養教育に取り入れた。また, 学生が海外の大学を訪問して現地の生活を体験することや, 地域文化やグローバル化に関するテーマに関して英語で議論するスタディツアーを実施した。グローバル化に関する聞き取り調査では, このような授業に参加している社会人は, 地球レベルの視点でグローバル化社会を捉えているのに対して, 参加していない学生は国際化とグローバル化の区別がついていない面があり, グローバル化に対する正しい認識を持たせる教育をすることが課題であることがわかった。

Cultural education in university for globalizing society

Makoto Ohashi¹, Meimei Ko², Sachiko Iriguchi³, Yugo Magata⁴, Takahito Saito¹¹Institute for Socio-arts and Sciences, ²Faculty of Integrated Arts and Sciences, ³Faculty of Medicine, ⁴Faculty of Technology, The University of Tokushima

(Key word: Globalizing Society, Cultural education, University education)

1. はじめに

グローバル化^{文末注参照} 社会に向けた人材育成が, 大学教育改革の大きな課題となっている。これからの社会がグローバル化していく中で, その過程における様々な問題に対処していくために, そのような諸問題に対して解決策を見出して, その解決のために行動できる人材が必要とされる時代がくると予測される。

それでは, グローバル化がさらに進むことによる地球レベルの諸問題として, 一体どのようなことが予測されるのだろうか。実は, この件に対

しては, 未だに十分に議論されているとは言い難い。この一因として, グローバル化社会における諸問題があまりに多岐にわたるために, 問題点の整理が十分に出来ていないことが挙げられる。グローバル化社会に対応出来る人材育成は, この問題点の整理を踏まえて進める必要がある。

このように, グローバル化社会に必要な人材育成とは, これからの社会がグローバル化していくことの社会変動を, 単にある地域の問題としてではなく地球レベルの問題として捉えることや, これから起こりうる様々な問題に関して, あらか

じめ予測して対策を取るなど、先見性を持った判断力や行動力を養うことではないかと思われる。

また、このような将来予測をする上で、これまでの世界の歴史の流れをつかむことが必要となってくる。すなわち文明の変遷や、文明を支えてきた宗教や哲学などの思想を始めとして、グローバル化の歴史としての植民地化、戦争、革命などの意味を、現代社会の諸問題や、これからのグローバル化社会との関係で捉えることが必要になってくる。

さらに、これまでのグローバル化の動きは、経済的要因が関係していることを注視する必要がある。これは、今後のグローバル化社会においても、その主要な原動力に成りうると考えられるためである。このように、これまでの歴史を、経済活動の視点から振り返ることが重要である。

大学における教養教育は、グローバル化社会の諸問題を様々な観点から捉えて、将来にわたって持続可能な社会を築くために必要な視座を育成することを一つの目標と定めることで、体系的な教育プログラムを作ることが可能であると考えられる。これまで、教養教育をどのように位置づけるのかについて、様々な議論がなされてきた。教養教育を体系化するためには、その目標を明確に定めることが必要である。グローバル化社会への対応を、教養教育の目標として設定することにより、教養教育の役割を明確化することが可能であり、教育の改革につながると考えられる。

本稿では、グローバル化社会に向けた大学教養教育のあり方を考えるために、徳島大学全学共通教育における、地域社会人及び留学生と共に議論をしながら体験的に学ぶ授業の取り組みを中心として、その意義を検証したい。

2. 取り組みについて

グローバル化社会の課題については、様々な観点からの検証が必要になる。そのためには、受講生が受動的に授業に参加するのではなく、自らが積極的に学びを作り上げるアクティブラーニング形式の授業が有効であると考えられる。そのために、アクティブラーニングによる幾つかの形式の授業を取り入れている。また、議論と行動を組

み合わせることで、理解を深めることを目指している。

A. 地域社会人が参画して、議論をする授業

グローバル化社会に関して造詣の深い社会人と共に、グローバル化社会に関連する社会問題を多面的な視野から議論をする。

授業題目

- ・グローバル社会と医療を考える
- ・持続可能な社会とは何か
- ・ボランティア活動から学ぶ持続可能な社会
- ・グローバル社会を考える
- ・ボランティアリーダーと語る地域社会
- ・持続可能な社会に向けた教育とは

B. 留学生と異文化交流体験をする授業

留学生と対話を通じて、異文化を理解すると共に、自国の文化に対する気づきを起こさせることを目的とした。

授業題目

- ・異文化交流から学ぶグローバル化
- ・異文化交流体験から何を学ぶのか
- ・グローバル・コミュニケーション I 及び II

C. インターネットを用いて海外の大学生と対話をする授業

海外の大学生との対話を通じて、お互いの社会環境の違いと、その背景に対する気づきを起こさせることを目的としている。

授業題目

- ・グローバル化社会に必要な異文化理解のために I 及び II

海外の交流相手校

- タイ・チェンラーイラチャパット大学
- 韓国・慶北大学
- 中国・青島理工大学
- モンゴル・モンゴル科学技術大学

D. 海外の大学を短期訪問するスタディツアー

海外の大学を短期訪問して、現地の大学生と共に地域文化やグローバル化社会テーマとしたプレゼンテーションと議論をおこなう。

- ・モンゴル国スタディツアー
- ・タイ王国スタディツアー

E. ピアラーニングを中心としたサマースクール

徳島大学総合科学部が主催しているサマースクールの取り組みである¹⁾。この取組は、ピアラーニング（学生同士で学び合うという学習形態）を体験することにより、異文化理解を深めることを目指している。交換留学の協定校の学生が、夏期休暇を利用して4週間または8週間の間、徳島大学において、全学共通教育教育の社会人が参画する共創型学習や教養科目に体験参加する。全学共通教育受講生は、次のような場において、サマースクール参加の短期留学生と共に、グローバル化社会に必要なコミュニケーション力を養う。

活動内容

- ・グローバル化に関する授業
- ・自主活動としてのピアラーニング
- ・調理体験を通じたコミュニケーション
(グローバルクッキング)
- ・登山や地域のインターンシッププログラム
(ボランティア活動に留学生と共に参加)

F. International Student Conference の開催

総合科学部と工学部が主催するサマースクールの一部を合同プログラムとして実施している。グループディスカッションやグローバル化社会に関わるプレゼンテーションにおいて、留学生と共に学ぶ。同様の趣旨のカンファレンスは、モンゴルスタディツアーにおいても毎回実施した。

3. 結果と考察

徳島大学では、大学の教養教育の改革の試みとして、大学教育に関心の高い地域社会人、学生及び教員が、同じテーブルについて、あるテーマについてお互いに学び合うという形式授業を導入した⁽²⁾。地域社会には、これまで様々な職業経験

の中で培ってきた社会で生きていくための知恵を、これからの世代に継承したいと考えている知識人も多く、これからの大学教育は、このような地域社会の知恵を取りながら改革を進めていく必要がある。グローバル化社会に対応できる人材育成に関しても、地域社会人の中には、これまで様々な職業の中において、国際的な場において活躍してきた人や、海外での経験が長くその経験を次世代の教育に生かすことを望んでいる人、ボランティア活動として国際交流に貢献してきた人もいる。また、多くの社会人は、戦後社会の変革を自ら体験する中で、グローバル化社会への諸問題と向き合いながら生きてきたという経験も持ち合わせている。さらに、このような地域社会人は、生涯にわたって学び続けることの重要性を自らの体験から学んできたために、体験を通じた学びの重要性を次世代に伝えることの意義を理解している。そのために、学生との議論に参加することに関して、常に前向きの姿勢が感じられる。

大学において、学生が地域社会人と共に学び合う場を設けることにより、学生が生涯にわたって学び続けることの意味を、間近に地域社会人を観察することにより、自ら考える場とすることを目指した。この取り組みに参加した学生の多くが、生涯学習に取り組む地域社会人の役割を評価しており、この授業において実際にコミュニケーション力が向上したとしている。また、この授業に参加している地域社会人の中には、数年にわたって連続参加している人の割合が多く、生涯学習の一つの形としてしだいに定着してきていると言えよう。今後は、生涯学習の導入教育としての教養教育という概念が一般化されるように、多くの社会人が学生と共に学ぶ場を設ける必要があろう。グローバル化社会に向けた教養を身につけていくことは、一生続けることが必要であり、このような教養教育を生涯学習の導入として位置づけることは、学士課程教育の中での教養教育の役割を明確化することにつながる。また、生涯学習の意義を社会人の姿を見て学ぶことができるために、今後の社会の知的基盤を強化することにつながると期待される。

表 1 社会人(S)と学生◎に対する聞き取り調査結果 社会人参加の授業に参加したことのある人(授業参加経験あり)と経験のない人(授業参加経験なし)に対して、調査を実施した。

グローバル化とは何か

- C1 外国との出入りが多い(授業参加経験あり)
- C2 世界を一つにする(授業参加経験あり)
- C3 広く、人と繋がる(授業参加経験あり)
- C4 全人類共生社会(授業参加経験あり)
- C5 地方でも発信できる(授業参加経験なし)
- C6 人間関係を広げるチャンスや機会が多い(授業参加経験なし)
- C7 枠を広げる(授業参加経験なし)
- C8 幸せ(授業参加経験なし)
- S1 外国のいいところを取り入れる(授業参加経験あり)
- S2 いろんな国の人たちと交流する(授業参加経験あり)
- S3, S4 世界が繋がる(授業参加経験あり)
- S5 自分の国のものさしで他の文化を見る(授業参加経験なし)
- S6 国境がなくなること(授業参加経験なし)
- S7 国と国同士の垣根を越えての交流(授業参加経験なし)
- S8 英語ができる人から情報が行き渡って国が発展する(授業参加経験なし)

グローバル化社会に必要な能力とは

- C1 自分の考えをしっかりと持つ(授業参加経験あり)
 - C2 互いの違いを認め合う(授業参加経験あり)
 - C3 誰とでも親しく話ができること(授業参加経験あり)
 - C5 情報を見立てる力(授業参加経験あり)
 - C6 語学力(授業参加経験なし)
 - C7 必要な能力を取捨選択する(授業参加経験なし)
 - C8 自分で考えること(授業参加経験なし)
 - S1 語学力(授業参加経験あり)
 - S2,S3 柔軟性(授業参加経験あり)
 - S4 コミュニケーション能力(授業参加経験あり)
 - S5 語学力よりもジェスチャー等用いたコミュニケーション力(授業参加経験なし)
 - S6 国としての交渉力(授業参加経験なし)
 - S7 コミュニケーション能力(授業参加経験なし)
 - S8 意思疎通できるための英語力(授業参加経験なし)
-



図 1. 地域社会人が参画する授業におけるグループディスカッション

グローバル化というキーワードを、今日的な課題と関連付けて、これに対する勉学を積極的に取り組んで行きたいという傾向は、学生や社会人の中に強く、授業においても積極的な取組みを行うことができた。とりわけ、社会人や留学生と共にグローバル化に関連する事項について議論することは、受講生たちに良い経験になったと思われる。留学生と社会人を交えた中で、「EU の課題」をテーマにして議論したときには、特にヨーロッパ圏からの留学生が積極的に発言する場面が目立っていた。また、「TPP の行方」というテーマで議論したときには、社会人の積極的な発言が多く見られた。これまで、グループで議論をした経験のない学生においても、リーダーシップを発揮しながらグループの意見を取りまとめるグループリーダーになって、率先して課題に取り組む姿勢がしばしば観察された。

今回の取組みに参加した留学生の大部分は、総合科学部サマースクールに参加した海外の学生であり、日本語レベルに個人差はあるものの、簡単な日常会話程度以下の学生がほとんどであり、実際の議論は英語で行われていた。ヨーロッパ圏の学生たちの意見を、全ては理解できないながらも、必死に聞き取ろうという学生が多かったが、積極的に発言をする学生の数は限られていた。その原因として、英語力の問題だけではなく、内容の理解の問題があると思われる。このように、英語の授業以外に、コミュニケーションの手段として英語を使う場面を作り出すことで、異文化コミ

ニケーションに対するモチベーションを上げることが、グローバル化社会に対応できる人材育成のために、さらに必要になってくると思われる。

グローバル化に対応する人材育成のために、異文化交流の推進は有効な手段のひとつである。海外の大学生と交流する機会を増やす目的で、H24 年度より総合科学部サマースクールを実施している¹⁾。今年度は、留学生と共に合宿をしながら生活を共にする中でコミュニケーション力を身につけることが可能であるかを調べる目的で、日本人学生と留学生と一緒に夕食を作って食べるというグローバルクッキングの取組みを実施した。サマースクール期間前の練習を含めて、約 20 回実施した。この期間において、延べ約 200 人の学生が参加した。今後の課題としては、基本的に料理を作る経験が少ない学生が多いことが挙げられる。このような環境下で、多国籍の学生たちがグループで料理を作る場面では、コミュニケーション力が高くリーダーシップを取ることができる学生が必要であり、さらに、その学生が料理法を他人に教えることができるほどに練習を積んでおく必要がある。今後は、このような場でリーダーシップを取れる学生をどのようにして育成していくかを検討する必要があるだろう。また、グローバルクッキングにおいて、留学生とコミュニケーションを取ることができたという学生もいた反面、そうではなかったとする学生もいて、クッキングの前に人間関係の構築が課題であることも明らかになった。

留学生、社会人および学生が共に議論をしながら学ぶ「学びのコミュニティ型授業」^{3,4)}への参加者のうち、社会人と学生がグローバル化に関してどのような意識持っているのかを調査する目的で、聞き取り調査を実施した。この聞き取り調査は、授業に参加した学生に対する勉学の成果や社会人参加の意義を確認するために行った。授業に参加していない学生や、社会人に対しても同様の聞き取りを行った (表 1)。その結果、授業に参加した社会人は、グローバル化社会に関して、自らの目線だけではなく、グローバルな視点から、グローバル化社会を捉えている人が目立っていた。これに対して、授業に参加していない社会人は、自身の視点や、生活の拠点のある地域からの

視点をもとにしたグローバル化社会を取り上げる意見が多かった。その一方で、学生からの意見では、授業に参加した経験のいかんに関わらず、国際交流の面だけを取り上げたグローバル化社会をイメージする学生がほとんどであった。

このように、授業に参加した社会人は、授業での議論を通じてグローバルな視点を身につけていった可能性がある。あるいは、授業に参加する前からグローバル化社会に興味を持っていたために、この授業に参加した可能性もある。学生が「グローバル化」と「国際化」と区別が出来ていない原因として、時間的な制約から、授業の趣旨が十分に理解されていないことが挙げられる。また、国際化に対する予備知識は、自身の経験も含めて十分にあるのに対して、グローバル化という比較的新しい用語に関しては、その本質をつかみにくいという現実があると思われる。一般的にマスコミ等で、グローバル化社会の抱える本質的な問題が取り上げられる機会も多くはない。そのために、「グローバル化」と「国際化」の違いについて考える機会が、十分ではなかった可能性がある。また、単に「EU の課題」「TPP の行方」というテーマで議論するだけでは、グローバル化の持つ様々な問題を理解することができなかつたことも考えられるために、今後は毎回の議論のテーマをグローバル化に関する系統的な理解を促すような形にするなどの工夫が必要であろう。

グローバル化社会に対応できる人材育成のための教育としてグローバル化社会を体験学習をすることにより、知識を確かなものにするができる。このグローバル化社会に向けた大学教養教育の一環として、モンゴルやタイへのスタディツアーを実施している⁵⁾。いずれも、現地の大学（モンゴル、モンゴルビジネス大学、モンゴル健康科学大学；タイ、アソムシン大学（ルンアルン学園）、チェンラーイラパチャット大学）において、徳島大学の学生との International Student Conference を実施した。英語でのプレゼンテーションのあとで、そのテーマに関してグループで議論することにより、英語で自分の意見を発言するとともに、相手の意見に対して、自分の考えを伝える実践である。お互いに英語が母国語でないために、言語において対等な立場で向き合うこと

ができるという長所がある。

文部科学省の国立大学改革プラン（平成 25 年 11 月）では、グローバル化に関する社会の変化に関して、「国境を越えた大学教育の提供」、「国境を越えた学位の適切な評価に向けた動向」を掲げており、世界最高の教育研究の展開拠点としての国際競争力をつけることを目標としている。また、徳島大学が公表している「徳島大学機能強化プラン～国立大学改革基本的考え方に基づいて～」(平成 25 年 7 月)では、グローバル人材の育成に関して「①日本人学生の海外派遣と留学生（未来の大使）の受け入れの双方を抜本的に増加、②優秀な学生や教員が国内外から集い交わるグローバルキャンパスの実現、③英語による授業の増加と日本文化の理解促進の両立」を挙げている。少なくとも、これらの資料の中からは、地球レベルでの人類共生社会の実現のための人材育成という観点を見出すことは難しく、どちらかというところ、グローバル化に伴って現実起こってくる問題への対処という色彩が強い。文科省の国立大学改革プランでは、大学の教育と研究において国際競争力をつけることを大学教育改革の目標としている。また、徳島大学機能強化プランでは、留学生を増やすことに重点が置かれている。教養教育においては、グローバル化社会に関して、より広い視野から考える機会を設けることが必要であると考えられる。

グローバル化社会に対応するためには、社会の中で起こってくる様々な矛盾をどのようにして解決していくのかというような課題発見能力と課題解決に向けた思考力が必要となってくる。例えば環境問題は、人間の経済活動と深く関わりを持っており、経済成長を目指すという方向性が多くの人類の共通の目標であるとするならば、果たして地球環境と経済成長の調和が可能であるのかというような考察を行う機会を設けることにより、現実の諸問題の抱えている矛盾に気づききっかけになると考えられる。さらには、地球環境を犠牲にしてでも、人間の経済活動を続けることに関する正当性を認めるという社会のあり方を問うような議論も、このような矛盾点を考える上で有効であると思われる。グローバル化社会に関する諸問題は、現代社会に生きる人間が、人間と

人間との関係だけではなく、人間と地球環境との調和をどのように保っていくのかという本質と深く関わりを持っている。

グローバル化社会の問題は、単に現代社会の問題として捉えるだけではなく、過去から未来にわたる人間社会の変遷を歴史的な観点から捉えることが重要な意味を持っている。ある意味では、人類の歴史はグローバル化進展の歴史であり、今後起こりうることを予測をする上でも、歴史的な観点から俯瞰的な見方をすることが必要であろう。このように、現代のグローバル化社会の諸問題を考える機会を、教養教育において積極的に取り入れる必要があると思われる。グローバル化社会の諸問題は、世界共通の課題であるために、教育改革も国際的な協力関係を築きながら進めていくことが課題となっている。

教養教育に関しては、これまで多くの大学で改革が行われてきたが、グローバル化社会に対応できる人材育成を念頭においた改革は、これからの課題であると思われる。教養教育の理念・目的については、「新しい時代における教養教育のありかたについて」(中教審答申)において、「変化の激しい社会にあって、地球規模の視野、歴史的な視点、多元的な視点で物事を考え、未知の事態や新しい状況に的確に対応していく力」として総括しており、グローバル化社会の諸問題に立ち向かう姿を示している。その意味でも、教養教育はグローバル化社会に対応する人材育成の基盤をなす教育を目指すことにより、学士課程構築の中で、教養教育の位置づけを明確化できるとと思われる。さらに同答申では、教養教育において「個人が生涯にわたって新しい知識を獲得し、それを統合していく力」を目指すとしている。このように、中教審答申では教養教育の意義に関して、グローバルな視点の育成と、これを生涯にわたって学び続ける能力の育成という捉え方を明確に打ち出している。

教養教育の目標として、グローバル化社会に必要な視点の育成や、これを生涯にわたって学び続ける生涯学習の基盤育成として位置づけを行うことは、教養教育の改革の方向性に関して、明確な示唆を与えることにつながるとと思われる。グローバル化社会への対応という、今後の社会の変革

に対応する人材育成は、大学教育の限られた時間で完結するようなものではなく、年代や専門分野と関係なく学び続けるという社会全体の教育システムの一部として体系化していく必要がある。

グローバル化社会に向けた教養教育は、持続可能な発展のための教育(ESD)と深い関わりを持っている。ESDに関しては、これまで徳島大学の教養教育の中で、積極的に推進されてきた経緯がある。ESDとグローバル化社会に対応できる人材育成との関係について、今後さらに様々な観点から、議論される必要があるだろう。グローバル人材育成の目的が、単なる国際競争のためだけではなく、ESDに関連付けて考えることにより、これからの地球レベルでの課題がより明確になってくるとと思われる。グローバル化社会に必要なコミュニケーション力を身につけることは、グローバル化社会に



図 2. サマースクールのグローバルクッキング



図 3. モンゴル・ビジネス大学での International Student Conference

対応できる人材育成の第一歩として、充実を図る必要がある。しかしながら、それと同時に ESD を含めた多様な視点からグローバル化社会の行方について考える機会を設けることが、グローバル化社会に対応する人材を育成するために必要であろう。このように、グローバル化社会に向けた大学教養教育の充実が、これからの大学教育改革の課題であると考えられる。

謝辞 社会人、学生に対する聞き取り調査では、徳島大学大学院中恵真理子氏にご教示いただいた。また、総合科学部 1 年池田瑞姫氏には、聞き取り調査のテープ起こしに協力をしていただいた。ここに記して感謝したい。

注 グローバル化と国際化との区別に関しては、「グローバル化」は、地球を一つの世界という見方をするという地球レベルからの視点から物事を考えなくてはならないという時代を反映しているのに対して、国際化はある特定の国の中での問題である。国際化への対応では、言語を含む異文化理解の問題が大きな部分を占めることもあり得るのに対して、グローバル化への対応では、地球レベルの国際政治、軍事、経済、環境、教育、社会問題など、これまでの歴史では経験のない多岐にわたる事柄への対応が必要となる。また、これらの問題に対応するための持続可能な社会の構築や、これに関連する地域や国家レベルの課題も含まれる。

参考文献

1. 大橋 眞・齋藤 隆仁 Peer learning を主体としたサマースクールプログラム 大学教育研究ジャーナル, No. 10, 31-38, 2013 年
2. 大橋 眞 生涯学習と大学教育の融合から生まれる知の循環型社会構築—持続可能な社会に向けた地域の大学の課題—日本生涯教育学会年報 No. 32:227-244, 2011 年
3. 大橋 眞・中恵真理子・光永雅子・齋藤隆仁 世代間交流による生涯学習—大学教養教育における対話型学習—日本生涯教育学会論集 No. 33:133-141, 2012 年
4. 大橋 眞・中恵真理子・光永雅子・齋藤隆仁 地域社会人、学生、教員でつくる学びのコミュニティから創出される新たな視点 日本生涯教育学会論集 No. 32:3-11, 2011 年
5. 大橋 眞・佐藤高則・齋藤 隆仁 モンゴル国との学生交流から、何を学ぶのか : International Student Conference と医学系実習体験を通して 大学教育研究ジャーナル, No. 12, 66-73, 2012 年